週刊民社　　週刊民社　昭和52年9月2日（第三種郵便物認可）第860号　（4）

四つの近代化を強力に推進

――新しい中国社会建設へ踏み出した華体制――

十一全大会の意義と今後の中国情勢

中嶋嶺雄東京外大教授

中国共産党の新しい指導部の人事が決まり、"毛以後"をになう中国の新しい指導体制が固まった。中国共産党は、八月十八日に第十一回大会を、翌十九日には第十一期中央委員会の第一回総会を開き、華国鋒主席をトップに、葉剣英、鄧小平、李先念、汪東興各副主席の計五人が政治局常務委員会を構成し、党を統率してゆく体制を決定した。そこで、十一全大会の意義、鄧小平氏の復活が意味するもの、さらには米中、米ソ、日ソの関係などにつき、中国問題の専門家である中嶋嶺雄東京外大教授に緊急インタビューを行った。

（インタビュアーは畑昭三機関紙局次長）

中嶋嶺雄氏

転換求める

――八月十八日に中国共産党の第十一回大会（十一全大会）が開かれ、華国鋒体制が確立しましたね。翌十九日には、第十一期中央委員会の第一回総会が開かれ、華国鋒主席をトップに葉剣英、鄧小平、李先念、汪東興の四副主席が選出され、華国鋒体制が正式に確定したわけですが、今回の十一全大会の意義についてまず、お聞きしたいと思います。

中嶋　これは、文化大革命という十年間、過去の内政を一掃してきたと思われる、いわゆる文革路線ですね。こういうものが、この大会によって二つの区切りをつけた、ということに意味があると思うんです。

文化大革命に区切りをつけ

しかし、考えてみますと、文化大革命というのは、六十五年の秋に、上海の姚文元が「新編歴史劇"海瑞罷官"について」という、いわば例の海瑞罷官から始まっているわけですね。それから紅衛兵運動にいたり、林彪批判の台頭にいたり、四人組が台頭してきた。これは、文化大革命のまきれもない一貫

注目

国際的な視野で

日中平和条約を考えよう

――中国の今度の近代化の方針では、中ソ関係はよくなるんでしょうか。近代化と中ソ関係というのは別なんでしょうか。

中嶋　私は、その場合にはリーダーシップを論じなければいけないと思うんです。一般的には、中ソ関係は当分うまくいかないだろうし、依然として中国は、ソ連社会帝国主義を第一に掲げているわけです。今回の大会でも。しかしながら私は、その辺はもう少し違った展望を持っており、今回のリーダーシップというのは、総じて実務派勢力優先だと思います。いってみれば、華国鋒と鄧小平の妥協的人事ではないか、という気がするんです。つまり、あの四人組打倒に功績をあげた汪東興とか倪志福という人たち、特に汪東興の場合は副主席に抜てきされている。いわゆるこれまで文革派でありながら、非上海グループだった連中が大きな地位を占めている。それと同時に、鄧小平系統の実務派のリーダーが、各関係レベルからも大分、党中央の政治部に入ってきた。そうして全体的な方向は、いわば四つの近代化というのはまさに鄧小平路線、周恩来路線であって、いってみればかつての実権派レベルの路線だ、といっていいんですね。

そうしますと対ソ関係にしても、毛沢東のように、ソ連はとにかく憎いんだ、とかソ連を敵として絶対的に固定し、すべてをそれによって駆動かすんではなく、もう少し政策的な、ポリシー・オリエンテイブな対ソ関係の形成に向っていく可能性がある。その場合に、こういう内政的な、いわば近代化路線、実務派路線をとってますと、その点でのソ連とのギャップは論理的には少なくなるわけです。

こういうレベルでむしろ考えた方がいいので、これからの中国の将来は、いわゆる穏健派とだけわれわれ、イメージアップすることはちょっと正しくないわけで、かなり中国なりの国益というものを冷静に考える、そういう政策マンがだんだん出てきてる、ということじゃないでしょうか。その限りにおいて中ソ関係は、私は一つの改善の方向が、ある一定のレベルは出てくるだろうということを、当然読んでおいていいと思う。

――華国鋒体制ができた段階で、まずアメリカのバンス国務長官が訪中する。バンスと華国鋒の新体制との会談が瀬踏みで終るものか、あるいは米中関係を一歩でも前進さすものか、こういう点の見通しはどうですか。

中嶋　当初アメリカの予定としては、バンスの訪中をできるだけ事務的に終らせたい、という意向があったようですね。そんなことを含めて、当面の米中関係の成熟度から見ますと、まだまだ国交樹立に、具体的に一歩踏み出すところまでいかないような気がします。ただアメリカとしても、いよいよ本格的に中国外交なり、中国の今後の方向を考えなければいけない、というふうに感じていると思うんです。

基本ベースとしては、米日中のトランス・パシフィック・コラテイション、太平洋横断的連携というもの――あわよくば軍事戦略上の提携を含めて――をアメリカは求めたいという傾向が強くなってきています。これは特に新太平洋ドクトリン以来そうなんですけど、そういうアメリカなりの対ソ戦略に対する瀬踏と、中国なりの当面の考慮とはその点で一致するだけに、いわばその間に立っている日本が、どういう主体的な対応をとるかという問題が出てきていると思うんです。

ですから当分というか、今回のバンス訪中によってすぐ、ということはないので、私の見通しは、中間選挙が来年に迫ってますが、カーターはその後に考えるのではないか、という気がするんです。

いずれにしても一九七九年から八〇年にかけて、米中はご承知のように国交樹立をどうするか、中ソは中ソ友好同盟条約をどうするか、という本当に歴史的な選択が行われるわけです。それとの関連で、日中平和友好条約を考える。それくらいの世界史的な視野を持たないと――日中は日中だけ、あるいは参院選までとか、次の何々まで、という発想はおかしい。

――そこで、日本の国内政治とも関連し、日中平和友好条約の締結の時期というのは、前よりは好ましい方向にいきますか

中嶋　一口にいいますと、四人組時代よりも当たりは、どちらかというとモデレート、穏健になるような気がします。しかしながら、当たりが穏健になるということは、それだけ手ごわいわけですからね。それだけに、日中平和友好条約については、まず中ソ関係がどうなるかということ。中ソは軍事同盟条約を結んでいるわけです。この期限が一九八〇年で、一年前に両者が態度を明らかにしなきゃならない。外交政策が変わる可能性が出てきたわけです。この可能性を本当はここ二、三年見てみる必要があると思うんです。

しかも、そもそも平和友好条約というのは、いわば紛争処理の後で、互いに問題がなくなったときに初めて結ぶべきであり、懸案が残っているがそれはお互いに触れることはよそう、という形で結ぶのは一番まずいですね。日中関係というのは、非常に問題が起きやすい歴史的な環境にあるわけです

8月20日、北京の人民大会堂で、第十一回全国代表大会に出席した全代議員と会見する右から華国鋒主席と李先念、汪東興、鄧小平、葉剣英各副主席―新華社・共同

風見鶏の歌

上照彦

と入江さんが言った。を、僕は至極面白いと思った。さっそく、それを撞毫（きごう）して贈ってもらうようなことまで頼みこんでから散会した。ところで、帰上に、記念の意味もある。ということで、これに決めた。

さて、命名した以上は、とゐを明らかにしなくてはいけない。山荘の

て、ここの管理人さんに頼んで作ってもらったら、大きな三角形の標札ができてきた。それにベンキで本欄のカットの如き風見鶏を描き、下に三字を連ねた。

中嶋嶺雄東京外大教授に聞く

文化大革命の意義と今後の中国情勢

党の新しい指導部の人事が決まり、毛以後をになう中国の新しい指導体制が固まった。中国共産党八日に第十一回大会を、翌十九日には第十一期中央委員会の第一回総会を開き、華国鋒主席をトップ鄧小平、李先念、汪東興各副主席の計五人が政治局常務委員会を構成し、党を統率してゆく体制をこで、十一全大会の意義、鄧小平氏の復活が意味するもの、さらには米中、米ソ、日ソの関係など国問題の専門家である中嶋嶺雄東京外大教授に緊急インタビューを行った。

（インタビュアーは畑昭三機関組織局次長）

中嶋嶺雄氏

転換求める強い潮流

文化大革命に区切りをつけ 実務派を中心に

—八月十八日に中国共産党の第十一回大会（十一全大会）が開かれ、華国鋒体制が確立しましたね。翌十九日には、第十一期中央委員会の第一回総会が開かれ、華国鋒主席をトップに葉剣英、鄧小平、李先念、汪東興の四副主席が選出され、華国鋒体制が正式に確定したわけですが、今回の十一全大会の意義についてまず、お聞きしたいと思います。

中嶋 これは、文化大革命という十年間、過去の内政を一掃してきたと思われる、いわゆる文革路線ですね。こういうものが、この大会によって二つの区切りをつけた、ということに意味があると思うんです。

しかし、考えてみますと、文化大革命というのは、六十五年の秋に、上海の姚文元が「新編歴史劇『海瑞罷官』について」という、例の海瑞罷官から始まっているわけですね。それから紅衛兵運動にいたり、林彪批判の台頭にいたり、四人組が台頭してきた。これは、文化大革命のまきれもない一つのプロセスですね。それらの人たちが、文革の火付け役以下、すべて失脚した上に、今回の党大会というのが成り立っているわけです。しかも、これらの人たちがすべて失脚した上になお、名目的には文化大革命の勝利を謳い、毛沢東思想の勝利、毛沢東路線の勝利を語らざるを得ないところに、同時に、今回の大会の一つの大きな問題点があると思います。

ですから、一言でいえば中国は、いわば毛沢東思想なり、路線というものの、これまでもっとも本質的なものに対し、非常に皮肉な結果を生み出しているんじゃないか、という気がしますね。従って、今後の中国は、よくいわれるんですけど、いわゆる四つの近代化（農業、工業、国防、科学技術）を中心に、中国社会の現代化、一口でいえば、華国鋒路線に進んでいくだろう。

—大会の総括というのは、おっしゃるように毛沢東路線の、第一次文革の終えんだ、と。そういう宣言をしている。

しかし、表向きには毛路線を継承して、継続革命をやっていくんだ、といってますが、鄧小平の復活、それと四つの近代化という意味で、先生のおっしゃったように、新しい近代化に進んでいく、ということなんでしょうか。

中嶋 実質的には、まさにおっしゃる通りだろうと思います。

—今度の中央委でも、実務派、あるいは文化革命で追放になった手厚い旧幹部が復活したり、ということで、今度の大会を契機にしてというよりは、すでに七十五年の杭州事件、南京事件、天安門事件などの内部に、いわば四つの現代化を求める、毛沢東思想によって発動された政治優先の社会から、もっと実務的な社会主義建設の路線への転換を求める潮流が、内部的には非常に成熟してきたわけです。それの一つのきっかけが、プロレタリア理論学習運動などが叫ばれ、批林批孔運動が叫ばれている最中に起った杭州の労働者たちによる賃上げ要求ですね。

非常に切実で、具体的な要求項目を掲げた二つの社会的な動きが下から起っていた。そういう意味から見ますと、すでに中国社会は、内部的にはこれまでのような「貧困のユートピア」といってるんですけど、貧しいことがいいことだった社会主義では、もうすまなくなっていたと思うんですね。外の世界との交流もあるし、外の世界をだんだん見てくると、やっぱり中国はこれではだめなんだ、という感じが出ていたわけで、その辺を深刻に認識していたのはやはり周恩来であり、鄧小平であったと思うんです。

こういうふうに考えますと、この大会を契機にしてというより、今度の大会は、そういう中国社会の潜在的な潮流の追認であり、確認であったといってもいいと思います。にもかかわらず、一方では走資派批判だとか、左からのキャンペーンがありましたから、その無理が実は、去年の天安門事件で爆発しているわけですから、中国社会の一つの方向からすれば当然の帰結であった、といってもいいんじゃないかと思います。

中国の新しい指導体制が固まった。……中国の諸問題について語る
中嶋東京外語大教授（左）とインタビュアーの畑機関組織局次長（右）

国際的な視野で

日中平和条約を考えよう

そこで、日本の国内政治とも関連し、日中平和友好条約の締結の時期というのは、前よりは好ましい方向にいきますか。

中嶋 一口にいいますと、四人組時代よりも当たりは、どちらかというとモデレート、穏健になるような気がします。しかしながら、当たりが穏健になるということは、それだけ手ごわいわけですからね。それだけに、日中平和友好条約については、まず中ソ関係がどうなるかということ。中ソは軍事同盟条約を結んでいるわけです。この期限が一九八〇年で、一年前に両者が態度を明らかにしなきゃならない。外交政策が変わる可能性が出てきたわけです。この可能性を本当はここ二、三年見てみる必要があると思うんです。

しかも、そもそも平和友好条約というのは、いわば紛争処理の後で、互いに問題がなくなったときに初めて結ぶべきであり、懸案が残っているがそれはお互いに触れることはまあ、という形で結ぶのは一番まずいですね。日中関係というのは、非常に問題が起きやすい歴史的な環境にあるわけですから、その辺をもう少し詰める必要があると思うんです。しかもこの条約が、単にシンボリックな平和条約であれば、問題はないが、覇権条項というものが含まれる。中国なりの世界戦略の一環に位置づけられている条約、といっていいわけです。これをソ連がどう受けとめるかという問題があるわけですね。そういう条件に、戦略的な背景がある条約だけに、この問題についてはもっと突っ込んだ議論をしていくべきですね。

—最後に、この機会にいっておきたいことはありますか。

中嶋 じゃ一つだけ。一般に鄧小平の復活を、華国鋒体制の中での復活、というふうに新聞は書いてますが、果たして鄧小平がこのまま華国鋒のサポーターにとどまっているかどうか、ということがあるんです。私は、この間の北京政変というのは、まだまだいままでの政治の悪循環を断ち切ってないような気がするんです。というのは、華国鋒のやり方そのものにもかなり問題があった。強権を発動したわけですからね。そのことを徐々に追認させていって、今回の大会まで持ってきたんですけど、華国鋒の持っている政治的な体質と、鄧小平の政治的な体質は根本的なところで、かなり違うということです。

華国鋒はいま、何といっても毛主席が「あなたがやれば安心だ」といったという、お墨つきをかざしている。鄧小平は、年は華国鋒よりとっているが、ソ連共産党の言葉でいえば、ある種のアパラチ、●官僚としての実績と力がある。しかおかつて、スターリン批判の洗礼を受けて、毛沢東思想を覚醒的から全部削ったこともある人間ですからね。

毛路線の立場にたって、それを正しいということにおいてのみ、初めて自分の存在価値がある華国鋒の立場と、中国社会の一つの潮流に乗っている鄧小平の立場とは、根本的に違い違うわけです。その点で鄧小平が今後、どういうふうに政治に、彼の余生をかけるか、私は鄧小平の個性からしても、やはり歴史に名を残そうとするんじゃないか、という気がするんです。その辺は今後も見ていく必要があると思いますね。

—ありがとうございました。

注目される"動き"

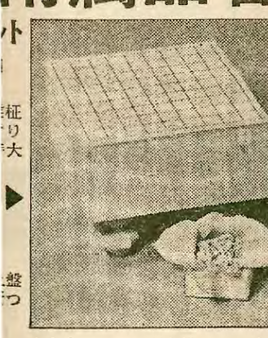
新体制の中の鄧小平氏

8月20日、北京の人民大会堂で、第十一回全国代表大会に出席した全代議員と会見する右から華国鋒主席と李先念、汪東興、鄧小平、葉剣英各副主席—新華社・共同

と入江さんが言ったのを、僕は至極面白いと思った。さっそく、それを揮毫（きごう）して贈ってもらうようなことまで頼みこんでから散会した。ところで、帰上に、記念の意味もある。ということで、これに決めた。

さて、命名した以上は、とれを明らかにしなくてはいけない。山荘の入口に、ここの管理人さんに頼んで作ってもらったら、大きな三角形の標札ができてきた。それにペンキで本欄のカットの如き風見鶏を描き、下に三字を連ねた。

附属品各種



早急にお送りいたします。
●合成盤　●差込盤
株式会社
—15 〒983 ☎ 94—2421(代)